

学業成績に影響を及ぼす関連要因の検討

山北 和幸 (G160010)

指導教員：土田 満先生

キーワード：学業成績、生活習慣、身体症状、行動、サポート、性格特性

はじめに

近年、学生の学力低下が問題となっている。背景には、「ゆとり教育」、「AO 入試」、「全入時代」、携帯、インターネット等の利用時間の増加等がある。大学入学生の問題点として、学習習慣がなく、学ぶ目的が明確でない学生の割合が3割から半分以上いるとの報告もあり、その時代に応じて対応せざるを得ない状況にあり、学生の質を保つために入学前講座等の取り組みが実施されている。

学業に影響を及ぼす要因として、生活習慣、環境、行動、性格等が報告されている。若杉ら¹⁾はアルバイトが学業に影響するが社会性も向上するため、両立させる指導も必要性があると報告している。一方、外山ら²⁾は学業達成につながる意欲感情を高めるためには注意を自己に焦点化し、達成できるという統制感が重要だと報告している。この様に学業といくつかの要因との関連を検討した報告は見られるが、多くの関連要因との相互の関係性を加味して検討した報告はほとんど見られないのが現状である。

以上のことを踏まえ、本研究では、成績が不良である学生における教育の質の向上を目的とし、学業に影響を与える関連要因とそれらの相互の関連性を検討した。教員が学生の背景を考慮に入れて効率よく指導する手掛かりとしたい。

方法

1. 対象者

愛知県のA専門学校の理学療法学科、及び看護学科の学生で調査に協力を得られた131名とした。

2. 調査期間及び方法

2017年7月～8月に、無記名自己記入式アンケート調査を実施した。

3. アンケートの内容

属性、成績、生活習慣、身体症状、学業場面での行動、友人・家族や教員のサポート、性格特性から構成した。

4. 分析方法

IBM SPSS statistics Ver. 24 と IBM SPSS AMOS

Ver. 24 を用いた。

結果

記入漏れ等がなかった115名を分析対象者とした。

1. GPA と種々の要因との関連

対象者のGPAを「下位群」「中位群」「上位群」の3分位に分けた。

1) 生活習慣との関連

(1) 睡眠習慣

平日とアルバイトがある日の起床時間は、GPA上位群が下位群と比較して早く起きる割合が有意に高かった。平日、休日、アルバイトのある日の就寝時間は、GPA上位群で早く寝る割合が有意に高かった。

(2) アルバイトの習慣

GPA上位群が下位群と比較して、アルバイトを行っていない割合や試験1週前の平日にはアルバイトを行わない割合が有意に高かった。また週におけるアルバイトの時間が、GPA上位群は少ない割合が有意に高かった。

(3) 趣味・娯楽の習慣

平日のSNS・メールやインターネットの利用時間は、GPA上位群が下位群と比較して、GPA上位群が長時間利用する割合が有意に低かった。

(4) 学習の習慣

学習時間は、GPA上位群が普段から学習している割合が有意に高かった。また、授業で理解できなかった時の対応において講師に聞く、1人で解決をしたり、そのままにしておく割合も、GPA上位群で有意に高かった。一方、GPA下位群では、同級生・上級生に聞くか、そのままにしておく割合が高く、自己学習時の音楽聴講の割合も有意に高かった。

2) 身体症状との関連

GPA上位群は講義中に居眠りをしないで講師の話を書く割合が有意に高かった。

自覚疲労においてGPA3群間を比較した結果、「やる気が乏しい」は、GPA下位群が上位群より有意に高く、逆に「目が痛い」は、GPA上位群が下位群より有意に高かった。

3) 学業場面での行動との関連

「授業中」の場面を GPA3 群間で比較した結果、GPA 上位群が下位群より学習を優先する行動の得点が有意に高かった。「授業内容が理解できないとき」の場面は、GPA 上位群が下位群、中位群より学習を優先する行動の得点が有意に高かった。すべての項目の総点も GPA 上位群が下位群より有意に高かった。

4) 友人・家族や教員のサポートとの関連

因子分析して抽出された教員のサポートにおける「情報・道具的」は、GPA 上位群が下位群と比較して有意傾向が認められ、GPA 上位群が教員のサポートがあると感じている割合が高い傾向があった。

6) エゴグラムとの関連

GPA 上位群は下位群に比べ、AC の得点が有意に高かった。各カテゴリー別の得点は、GPA 下位群と中位群は、同様なパターンを示し、GPA 上位群に比べ、A の得点が低いパターンを示した。

7) GPA と関連要因の相互関係

共分散構造分析の結果 (図 1)、生活習慣は GPA と自覚的疲労に負の影響を与え、さらに自覚的疲労を介して睡眠状況に影響を与えていた。

性格は学業場面の行動と友人と家族のサポートに影響を与えていた。友人と家族のサポートは教員のサポートを介して GPA に影響を与えていた。また理解できなかったときの対応、居眠りの頻度を介して GPA と学業場面での行動に影響を与えていた。

考察

睡眠の規則性が高い者ほど成績は良好で、逆に成績とは関連がなく学生の意欲が重要との報告がある。本研究では規則的な生活リズムと就寝時刻と睡眠時間の重要性が示唆されている。アルバイトや趣味・娯楽が生活リズムに影響する報告は多く、本研究でも GPA 下位群ほど試験前のアルバイトによる短い睡眠や勉強時間が成績に影響したことが推察される。

睡眠や勉強時間の減少は身体症状、学習習慣に影響することが報告されており本研究も同様であった。また学習時の音楽聴講が成績に影響し、課題が多いと作業能率が低下する先行研究と同様な結果も得られた。GPA 上位群は理解できないことを講師に聞く行動や 1 人で課題を解決する行動も明らかにされた。

学習習慣の定着には課題の優先順位を決定できる自己認知能力が必要と報告されており、本研究でも GPA 上位群は先行研究と同様であった。

自己認知は、ソーシャルサポートが影響することが報告されており、本研究でも周囲のサポートが自己効力感や欲求、衝動の自制行動能力に繋がることを認められた。ただ周囲のサポートの受け入れ方は、性格が関係し、GPA 上位群は AC の得点が高いことより、合理的、従順なため成績が良いことが推察される。教員は学生の性格も含めた背景を把握し、興味を持たせる指導が重要であることが示唆された。

参考文献

1) 若杉早苗, 他: 聖隷クリストファー大学看護学部 紀要 No24, 33-45, 2016
 2) 外山美樹: パーソナリティー研究 第 17 巻 (2), 168-181, 2009

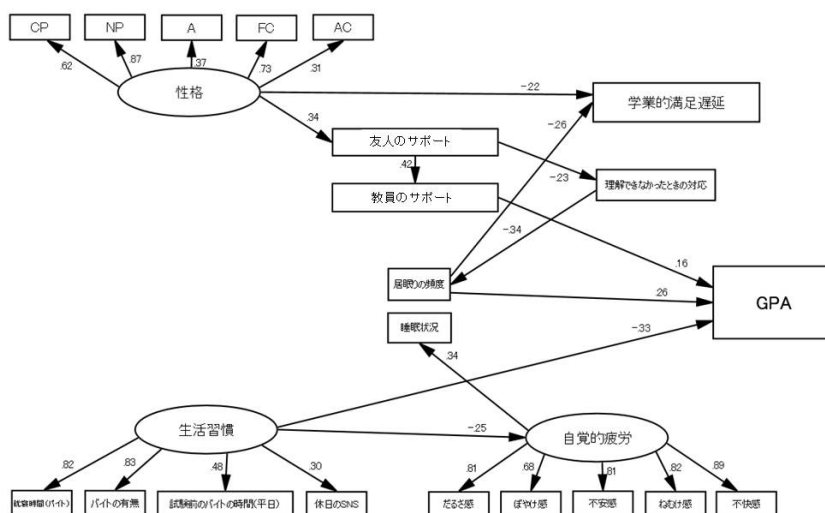


図 1. GPA と関連要因の相互関係